

## JICA ボランティア事業について

伊藤 隆文

(JICA 青年海外協力隊事務局長)



皆さんこんにちは。

今日ここにお集まりの83名の方、青年海外協力隊員の方が72名、日系社会青年ボランティアの方が11名ですけれども、皆さんは4月8日から駒ヶ根、二本松の訓練所、それから日系青年の方は横浜の国際センターにおいて派遣前の訓練研修を受けるのに先立ちまして、この現職職員の方々のための特別研修を設定させていただいたということです。今回の研修について大変お世話になります文部科学省の方々、それから筑波大学教育開発国際協力研究センターの方々に高いところからでございますが厚く御礼を申し上げたいと思います。

若干 JICA のボランティア事業についてご紹介したいと思います。青年海外協力隊は1965年、昭和40年に始まった事業でございます。これまで45年間に32000人を超える隊員を派遣しております。今日時点で世界各国にて2600名を超える隊員が75カ国で活躍しております。それから日系社会青年ボランティアは、南米の日本人移住地を支援する海外開発青年という制度として1985年、昭和60年に発足したものです。1996年、平成8年度に、名前を今の日系社会青年ボランティアに変更いたしまして、ボランティア事業として再出発しております。これまでに約1000名のボランティアを派遣しております。今日時点で5つの国で60名が活躍しております。JICA のボランティア事業にはこれ以外にも、シニア海外ボランティア、それから日系社会シニアボランティアの二つがありまして、4つ合わせますと現時点で3500人を超えるボランティアが世界で活動中ということになります。現職教員の特別参加制度は、先ほど芝田課長のほうからご紹介がありましたけれども、平成13年度に始まりました。実際の先生方が派遣されたのは平成14年からですが、この制度が始まる前にも、650名を超える現職の先生方が青年海外協力隊に参加していただいております。ただ、協力隊員の場合、訓練を含めて2年3か月の期間になっておりまして、学校の先生の場合は、学年の変わり目に日本にいる必要性が高いものですから、なかなか2年3か月という期間は先生方の現職での参加が難しいということもありまして、トータルで2年、つまり4月の初めに訓練に入っていただいて、2年後の3月下旬に帰ってきていただくという特別な制度を作った次第です。この制度が出来まして以降、7年間に516名の教員の方が派遣されております。今日現在では155名が活動されております。

JICA のボランティア事業には3つの目的があります。一つ目は、開発途上国の経済・社会の発展に貢献するという技術協力です。それから二つ目が、途上国と日本の友好親善と相互理解を促進するということです。それから、ボランティアの経験を日本の社会に還元する、これが3つ目の大きな目的になっております。この3つ目の日本社会への還元ということが非常に重要な部分になっておりまして、国の事業として、また国民の税金でこの事業が成り立っている理由がそこにあるといっても過言ではありません。教員の皆さんは、この社会還元という面でとても有利な立場にあると思います。つまり、帰国後再び教壇に立って、子供たちに経験を語る。そのことによって、日々の仕事の中

で社会還元をすることになるということで、これは他の職業にはないメリットだと思います。したがって我々としてはもっとたくさんの教員の方に JICA ボランティアとして海外に出ていただきたいと思っております。また、近年では日本の社会も大きく変化しまして、多くの外国人労働者が日本の経済を支える構造になってきました。その数は200万人といわれています。そして、その子供たちである外国籍の児童が7万人も日本の公立の学校に就学していると聞いております。おそらくここにおられる先生方が、3月まで教えておられた学校でも外国籍の子供たちが多かれ少なかれいたのではないかと思います。まさに異文化と共生する時代、社会になってきたということがいえると思います。こういう状況の中で、豊富な海外経験と異文化に対する深い理解を持って、さらに、言葉を含めたコミュニケーション能力に長けた人材というのが、教育現場で非常に必要になってくるのではないかと思います。皆さんがこれから訓練を含めて2年間協力隊員、日系社会青年ボランティアとしてチャレンジされると、必ずこうした期待される人材になると確信しております。どうか頑張ってください。

また、今回の特別研修の目的の一つは、みなさんに対する支援のプログラムを紹介することです。筑波大学を始めとする多くの大学による充実した支援体制が組まれています。協力隊の他の職種の場合には、これほど充実した支援体制はありません。どうか今回の研修で十分理解していただいて、活用していただきたいと思っております。

JICA のボランティア事業は、ボランティア本人が主役です。我々 JICA はこれをサポートさせていただくものです。現地での活動の場面では、日本では想像できない困難、あるいは苦勞がたくさんあると思います。しかし迷ったら、ハードルが高い方を選ぶという、チャレンジ精神でこれを乗り越えていただきたいと思っております。今日明日のこの研修が、皆さんにとって有意義なものになることを期待いたしまして私のお話とさせていただきます。どうもありがとうございました。